

[所長あとがき]

シンポジウムを省みて

ロマノ・ヴルピッタ

京都産業大学の世界問題研究所が現在進めている3年間の共同研究プロジェクトの主題は、現代ヨーロッパを中心とした反アメリカニズム現象の総体的な分析である。当然、親米・反米の議論に結論を出すことを目的としてはいない。一方、ヨーロッパ諸国における反アメリカニズムの理念と論理、意義と病理を明らかにし、各国の国内政治と国際秩序との関係を分析し、他方、ヨーロッパの反アメリカニズムを尺度として、日本を含む他の地域との比較的考察を行うことが目的である。そのために、地域と分野との両面において、広範な専門家を結集し、問題の多面的な解釈を試みる学際的な見地からアプローチしようとしている。

研究所のプロジェクトの枠組みのなか、このシンポジウムは重要な位置を占めている。その主要な目的は、研究プロジェクトに携わる所員と外部の方々との意見交換の場を設けて、今までの研究成果を検証し、新しい手掛かりを求めることである。このような場を昨年度も設けたし、来年度も設ける予定であるが、今回のシンポジウムは規模が大きく、我が研究プロジェクトの根本的な方針である学際性の理念をさらに広げて、参加者を各方面から招待したことを特色としている。また、海外から参加者を得たことで、本来我が研究テーマの本質的な性格である国際性を協調しようとした。

海外からの著名な方々も参加するこの会合を密室で開催しないで、社会に開放した。ちょうど、このシンポジウムは京都産業大学の創立40周年にあたる年に行われるため、創立記念の一つのイベントに位置づけることにした。このように、創立40周年を機に、『建学の精神』が謳う大学の国際性と社会性への決意を、微力ながらも明確に示そうとしたのである。

さて、このシンポジウムを省みると、我々が設定した学術上の目標が十分に達成されたと思う。当然、このシンポジウムの結果、アメリカニズムの定義が決定されたわけではない。もっとも、はじめからそれを目標にしたのではなかった。しかし、2日間に亘った講演と討論をもって、アメリカニズムとヨーロッパの問題が重層的、かつ多面的に検討され、我々所員は多くの示唆と刺激を受け、これからの研究のために貴重な資産になるだろう。

シンポジウムの軌道は初日に行われた基調講演によって敷かれたのである。著名な学者たるブルックホルスト教授に加え、在野の論客たるフィニ氏の登場は、学者だけではなく、学界の外で活動を展開している人物の意見を汲もうと意図するこのシンポジウムの性格を示している。

民主的な地球社会の秩序の創出を提唱するブルックホルスト教授は、それを脅かすアメリカの覇権主義を批判したのに対して、「現代」そのものに対して懐疑的であるフィニ氏は現代の先進的なモデ

ルとしてアメリカを批判した。二人の講演者の思想上の立場と現状の解釈は対照的であった。ブルンクホルスト教授は啓蒙主義の伝統を汲み、その価値観に基づく現代を是認し、国家を超越する民主的なグローバル化を提唱している。反面、フィニ氏は啓蒙主義的価値観を否定し、進歩への渴望が人類を破滅へ追い込むことを主張し、グローバル化を批判して、それぞれの国家と文化の独自性を重視し、国際機構そのものについて懐疑的で、主権国家の尊敬に基づく国際秩序を提唱した。このような対照的な視点に立っている彼らが、統合されたヨーロッパの強化が危機の打開ために必要なことで一致したのは、現在のヨーロッパ人の意識を理解するには重要な事実である。実際、過去20数年間の出来事を省みると、これは歴史の必然的な進路ではないかと、私は考えている。しかし、フィニ氏の発想で統合されたヨーロッパの位置づけは従来のパワー・ポリティックスの論理によるものであるのに、ブルンクホルスト氏は、それを新世界秩序のなかで地域協力の規模に位置づけ、アジアの地域協力を想定して、アメリカ・ヨーロッパ・アジアによる三極体制の樹立によってより民主的な体制の実現への希望を託している。とにかく、統合の問題は聴衆の中に反響を起し、翌日の討論の重要なテーマとなった。

しかし、2人の講演者の分析からアメリカニズムの概念、そしてそれに対するヨーロッパの自己主張は表れてこない。ブルンクホルスト氏によると、米・欧・日の大国に支配された世界に、地球社会・地球文化が形成され、1789年の理念に基づく shared values (共通価値観) を共有しているのである。したがってヨーロッパの価値観とアメリカのそれとの間に差異を認めていない。西洋的な近代化を非難するフィニ氏は、同じ西洋としてヨーロッパとアメリカを同一に見ており、現在アメリカとヨーロッパとの間に差異がないと断言している。彼らの観点から、ヨーロッパとアメリカとの対立は文化的・思想的ではなく、政治的である。

2人の講演者の主張に対する反論は主としてエドミスター氏と三島教授から展開された。エドミスター氏は、国際法取引の実践による経験に基づいて、「世界法、世界政治は、国家とは無関係の独自の組織を形成し」てきたというブルンクホルスト氏の主張に対し、いわゆる「完全にグローバル化された機能システム」が、機能するために国家の法的制度を必要とする実情を指摘した。というのは、グローバル化されたシステムの中でも、主権国家が独自の役割を果たしている事実を強調した。私も同感である。ブルンクホルスト氏も国際機構の決定の実施のためにアメリカの軍事力が必要であることを認め、国際社会がアメリカ、ロシア、中国の行動を規制する力がないことも認めている。将来により効率的な国際体制が形成されるだろうが、現在のシステムでは主権国家はまだ主役である。とりわけ、ブルンクホルスト氏が指摘する、グローバル化のもたらす社会的な不正と格差を矯正するために、国家の存在が不可欠である。

エドミスター氏の指摘は正しいが、反面単純でもある。グローバル化の体制の下、主権国家に与えられる選択肢の幅が次第に狭まってくることも事実である。アメリカのスタンダードが全世界で採用

されているのはもっとも効率的だからであるとの、エドミスター氏の指摘は正確であるが、しかしこのスタンダードが効率的に機能するための構造改革がアメリカの圧力の結果である事実について、エドミスター氏は言及しない。ちょっと理屈っぽい但し書きをつけたが、我々研究家が抽象的に議論している問題に、実践的に取り組んでいる氏の発言は重要であり、このシンポジウムに新鮮味を与えたことは事実である。

三島氏は、「文化保守主義と、政治的批判精神を結合した」議論が「教養人の退行的な自己満足に終始する」の危険性を指摘することで、フィニ氏の主張を根本から批判した。私も同感である。そしてフィニ氏の反論はこの疑問を払拭するにいたらなかったと感じた。しかし、西洋の近代的価値観に対する全面的な批判は聴衆のなかで反響を起こしたことは事実である。保田與重郎の『絶対平和論』との類似性も指摘する意見もあったが、與重郎が現代に対抗する世界観を提唱したのに、フィニ氏が何のビジョンも提供しないことは大きな違いである。氏の現代への批判は説得力があるが、かれの発想に破壊があり、建設がないという点から、一種のニヒリズムになってしまう。

ヨーロッパ統合について強い関心が示されただけに、ヨーロッパ連合の経験を踏まえて、統合を視野に入れた東アジアの地域協力のための具体的な政策を提案したセーサー・デ・プラード・イエベス博士のコメントは注目を浴び、活発な議論の対象となった。それについて、木村雅明教授はベシミックな意見を述べた。私も同感であり、実際、『世界問題研究所紀要』で、統合の理論の観点から東アジアの統合の困難さを指摘したこともある¹⁾。特に木村氏は、ウェストファリア体制の設立以降、ヨーロッパで国際関係システムが機能したのに、同じような経験が東アジアになかったことを指摘した。これはとても重要なポイントであると思う。あえて言えば、ウェストファリア体制以前からも、数百年の間、戦争と交易、対立と協力、人材移動、文化交流などを通じて、ヨーロッパ諸国は国家間関係のノウハウを蓄積し、これが統合への道を拓いてきた。このノウハウを東アジアは欠いている。とはいえ、デ・プラード氏が指摘した諸政策の実施は東アジア諸国同士の交流を深め、相互依存の関係を強化して、地域協力の体制を樹立するために有益であると思う。

隣国を代表する中国の朱建榮教授と韓国の宋錫源助教授は、2人ともアメリカに対するそれぞれの国の精神的姿勢を物語るために、フィニ氏の講演の冒頭に引用されたポール・アザールの言葉を利用したことは印象的だった。国民的感情の急速な変化を考えると、比較は適切であるが、1930年前後のヨーロッパで、数年前まで称賛の対象だったという同じ点が、今度アメリカの非難の理由になってしまったことについて注意を呼びたい。それはアメリカの政策に対する批判と、アメリカニズムに対する反発を見分けるために重要なポイントである。現在の東アジアには非難の対象になっているのはアメリカの政策である。しかし、市場経済と民主体制をワン・セットとするアメリカのイデオロギーや、

¹⁾ 拙論「東亜に於けるグローバリゼーションとリージョナリゼーション」、京都産業大学世界問題研究所紀要、第17巻、平成11年、pp. 146-170

アメリカン・ウェイ・オブ・ライフに対する人気は衰えていない。かえって、韓国と中国（そして、反アメリカ的感情が流行となった日本でも）アメリカ化が勢いよく進んでいる。でも、この点について二つのコメントを付け加えたい。第一に、アメリカの政策に対する反感がついにアメリカニズムに対する反発に変容すると想定できる。第二に、フィリップ・ロジェが指摘するように、アメリカニズムの表面的な側面を受容することは、アメリカニズムに共鳴することではない²⁾。

しかし、2人の研究者は、それぞれの国に反アメリカ感情が浸透しつつあることを認めても、アメリカニズムの価値観の評価について違った姿勢を示している。一方、宋氏は「アメリカン・スタイルのウェイ・オブ・ライフに馴染んでいる人々にとって、伝統的な価値観（中略）は保護すべき対象ではなく、むしろ普遍的な価値観としての民主主義に取って代わられなければものにほかならない」と断言することで、アメリカのイデオロギーに共鳴している。彼の批判的なのは、普遍的な価値観を提唱しても、権威主義的体制を支持してきたアメリカ政策の二重性である。他方、朱氏は、アメリカが提唱する「共通価値観」（民主主義、市場経済、人権の尊重）の普遍性を否定し、「東アジア共通価値観」の追求を提唱した。朱氏の提案のなか、特に感銘を受けたのは、「西洋文明と現代工業社会の長所を確認しつつ、（中略）全世界の未来のために東洋文明を再貢献するための基礎作業」である。私は同感であるが、21世紀における中国版の「和魂洋才」説の出現に、よい意味での驚きを感じた。

読売新聞解説部次長波津博明氏のコメントは、このシンポジウムのキー・ワードである「アメリカニズム」と「ヨーロッパ」と直接に取り組んでいる。氏は、政教分離を唱えながらも、強い宗教観に基づくアメリカン・イデオロギーの盲点に迫り、またこのイデオロギーの本質的な反ヨーロッパ主義を指摘する。波津氏はブッシュ政権を中心に、現在のアメリカ社会の具体例を挙げているが、氏が指摘する問題はアメリカニズムを理解するために根本的で、我々の研究のために重要な示唆を与えている。

フロアからの発言であるが、川北穰教授は、フィニ氏の講演を踏まえて、「成長パラノイア」という現代の病理を批判したが、現実的な対応策は今まで出てこないことを嘆いた。実際、フィニ氏は対応策を提案した。それは、自給自足（アウトルキー）である。当然、今の世界でアウトルキーは不可能であるのは、フィニ氏も認識していて、実際にそれを消費を減らすという意味で説明した。成長パラノイアのシステムから解放されるための最初の一步ではなかろうか。成長パラノイアから自由な世界システムを追求するため川北氏は東アジアの歴史を検討することになっているが、確かに中華思想は成長より安定を重視していた。鎖国日本も有益なモデルではなかろうか。私はまた、初期のローマ帝国も良いモデルであると思う。徳川日本と違って、オープンなモデルでありながら、経済成長を意識的に後退させ、領土拡張を持続可能な範囲で抑えた。近年、アメリカをローマ帝国に比較するのは頻

²⁾ Roger, Philippe *L'Ennemi Américain* Paris, 2006, p. 582

繁になったが、管見によれば、2つの帝国は対極的な存在である。

三輪公忠名誉教授の発言は日米関係に集中された観点から重視すべきである。この観点は他の参加者の発言にはあまりなかったからである。歴史的事例を挙げて日米関係の困難さについて述べた三輪氏の言葉に、アメリカの「原理主義」に直面する日本の親米知識人の心理的な苦悩が窺われた。

曾我見郁夫教授は物理学の観念である慣性が国際政治学にも適用可能であるかという問いをかけて、それが可能であれば、アメリカの慣性の運動をヨーロッパの慣性抵抗でスロー・ダウンさせるといふシナリオを想定した。氏の発想には共鳴できる。歴史の力だろうか、ある歴史的、政治的過程が発動すると差し止めることはできない。これは、政治、社会、歴史の慣性といえるだろう。しかし、慣性の運動に方向転換させるための英知が、人間にはあるという氏の意見は重視したい。

狭間直樹教授にシンポジウムのまとめという、重要な課題が与えられた。氏は、シンポジウムのテーマの重層的な性格と、参加者の意見の多様性に重点を置き、この難題を見事に果たしてきた。氏の発言には多くの貴重な示唆があるが、私はここで2つの点を指摘したい。その一つは、国際関係が法律によって支配されていることを認めても、法律の根底に倫理が存在しなければならないという主張である。私はまったく同感である。そして、昨今の世界情勢を見ると、倫理不在による問題が多いという事実を認めざるを得ない。後一つは、氏の結論であるが、アメリカ対反アメリカニズムという機軸に、西洋対東洋という経緯を加えたことである。この点に朱氏も言及したことがある。狭間氏は東西対立を儒教対キリスト教という意味深い文明論を展開してきた。キリスト教の本質を「己の欲するを他人にもこれを施せ」ということばに見て、それに儒教の本質として、「己の欲せざるところをこれを他人に施すなかれ」という論語の言葉を対峙させた。氏の説は、自分の価値観を他に押し付けるといふ「西洋の暗い悪癖」を非難しながら、それがキリスト教文化の所産であると主張するフィニ氏の主張と一致している。ただし、フィニ氏はギリシア哲学への回帰という、西洋文化のなかでの対応策を追求しているのに対して、狭間氏は西洋の正邪二元論を超克するために東アジアの中庸の理念を提唱したのである。

このシンポジウムで提出された多くの課題のなか、私は一部だけに触れるにとどまったが、それでも議論が幅の広い分野に亘ったことは理解できるだろう。我々にとって豊富な収穫であり、それは参加者の活発な議論の賜物である。

最後になりますが、参加者の皆様の御好意に厚く御礼を申し上げます。また、あらゆる支援を惜しまなかった大学当局の積極的な姿勢と、所員の献身的な努力がなかったら、このシンポジウムを開催することは不可能だったことでしょう。この点についても心からの御礼を申し上げます。

[Remarks of the Director]

Reflecting on the Symposium

Romano VULPITTA

The overall aim of the three-year research project that we have been carrying out at Kyoto Sangyo University has been the comprehensive analysis of the phenomenon of “Anti-Americanism”, particularly as it has found expression in contemporary Europe. Naturally, we have not been so much concerned with arriving at some sort of conclusion with regard to the merits of either Pro- or Anti-Americanism as such, but rather clarifying the ideals and logic, the implications and the ‘pathology’ of Anti-Americanism through an analysis of each country’s internal politics and their position within the world order. At the same time, we have attempted to take this European form of Anti-Americanism and treat it as a yardstick for making comparative observations in other regional contexts, including that of Japan. It is for this reason that, in terms of both regional background and specialization, we have assembled a broad array of specialists and sought to approach the theme from an interdisciplinary standpoint through a multi-faceted interpretation.

Within the broad framework of the Institute’s project, this symposium holds a special significance. Of course, its main purpose has been to give a chance for intellectual exchange between the staff affiliated with the Institute and the outside world, allowing them to check the results of their researches and seek new avenues for future research. This is something we already did last year and indeed we intend to do also next year. Nonetheless, this symposium has been distinguished by its scale and, it is distinguished by the degree to which we have succeeded in gathering together participants from so many different walks of life broadening in this way the interdisciplinary approach which is the fundamental aim of the project. By gaining the contributions of such overseas participants we have indeed been able to realize the internationality at the heart of this research projects theme.

Given that we had such eminent participants we made a point of not having meeting behind closed doors but made it open to the public and because the symposium fell on exactly the fortieth anniversary of the University’s founding we also decided to incorporate it into the program of celebratory events scheduled for this year. In doing so we were able reiterate on the fortieth anniversary the ideals of internationalism and social commitment that have always been a part of the “Founding Principle” of the University,—to pursue scholarship in an internationally open and socially constructive manner.

When we considered in hindsight what this symposium has achieved, I feel confident that we have indeed fulfilled the academic objectives entailed in the framing of the symposium. Naturally, we have not arrived at some final definition of “Americanism”,—it was not, after all, what we set out to do in the first place. Even so, with the presentations and debate that we have witnessed over two days, I believe that we have been able to approach the issues related to America and European relations in a multi-layered and multi-faceted way which has given us numerous insights and moments of inspiration which will be invaluable for our future research.

The basic lines for discussion for the symposium were laid down by the keynote speakers on the first day. The combination of the eminent scholar, Hauke Brunkhorst, along with the noted commentator and critic, Massimo Fini, reflected our wish to expand the scope of the symposium beyond purely academic concerns into the realm of ideas and opinions in the broader world. Professor Brunkhorst's promotion of the notion of developing a democratic world order while criticizing the hegemonic threats to that vision from America was contrasted with Dottor Fini's profound misgivings towards "modernity" itself and America as the exemplary model of that phenomenon.

The respective viewpoints of the two speakers, in terms of both intellectual outlook and interpretation of current affairs, were therefore highly contrastive. Professor Brunkhorst's speech was coloured by the tradition of the Enlightenment, presenting as it did the prospect of a democratic globalization that would transcend the nation and embody Enlightenment ideals. By contrast, Dottor Fini refuted such ideals, insisting that the endless quest for progress entailed in that tradition would lead to self-ruin. He also criticized the process of globalization, preferring to emphasize the need to maintain the autonomy of nations and their culture and proposing a world order that, due to his mistrust of international organizations, would be based on a respect for sovereign nation-states. Nevertheless, it is also important to note that despite their difference in outlook, they shared the common perception that the strengthening of a unified European Union would be necessary to resolve the current crisis, something that is important to note in our understanding of the consciousness of contemporary Europeans. When considering the developments of the last twenty years, I also personally believe that this process has been historically unavoidable. However, there remains a significant difference between the two, in way that Dottor Fini's conception of European unification is based on the logic of power politics, while Professor Brunkhorst conceives of it as part of the formation of a new world order based on regional cooperation. This is a scenario that includes recognition of Asian cooperation and the eventual emergence of a tri-polar framework centred on America, Europe and Asia which he hopes will retain a democratic character. Overall, I feel that the theme of unification resonated with the audience and formed an important theme in the following day's debate.

Having made these positive remarks I should perhaps also venture to make the observation that, so far as clarifying the concept of Americanism and an independent European assertion contrary to it, the analysis of the presenters had relatively little to say. According to Professor Brunkhorst, the world as controlled by America, Europe and Japan would involve the formation of regional communities and regional cultures that would hold in common the shared values of 1789. In this sense there is little recognition of the difference in the values of America and Europe. Even Dottor Fini who criticizes the Western conception of modernity tends to regard Europe and America as being part of the same Western bloc and asserted that currently there is little that distinguishes the two. Taken together, their perspective conceives of the stand-off between Europe and America as being more a political one rather than a cultural or intellectual one.

Amongst the commentators there were also two contributors who presented counter-arguments to the keynote speakers,—Dr Edmister and Professor Mishima. Based on his experience in international trading practice, Mr Edmister refuted Professor Brunkhorst notion of the formation of a system of "international law" and "world government" independent of nations, pointing out that a "fully globalized functional system" requires the effec-

tive functioning of legal systems on the national level. In other words, he was emphasizing how, even in a globalized system, sovereign states play an independent role,—something I concur with. Even Professor Brunkhorst himself recognized the necessity of American military might to enforce decisions made by international organizations, along with the fact that international society is not able to regulate the conduct of America, Russia and China. I do expect that at some time in the future an effective international system will be formed. However under the current system we find that it is still sovereign nation-states that play the main roles. In order to set right the social injustices and economic disparities engendered by globalization—as pointed out by Professor Brunkhorst—the role of the state government is still necessary.

Consequently, I felt that Mr Edmister's observation was essentially correct, albeit somewhat over-simplified. Under the system of globalization it is also a fact that the scope of choices open to various sovereign states can become narrower and narrower. Suggesting that the the American standard has been adopted worldwide due to its being the most efficient is true in one sense, however Mr Edmister does not take account of the fact that this adopting of the American standard has also come about due to pressure from America to undertake structural reforms in order to enable that standard to operate effectively. While I add these slightly theoretical and perhaps slightly pedantic points I should nonetheless reiterate that for academics who are accustomed to approaching things in an abstract way, it was important to have the benefit of Mr Edmister's views and indeed it was a refreshing element within the symposium.

Professor Mishima rather squarely rejected Dottor Fini's argument for embodying a certain "cultural conservatism combined with political criticism" and he highlighted the danger that such position will end in "reducing everything to the matter of cultured persons' self-satisfaction". I basically agree with this, and I don't feel that Dottor Fini's response to Professor Mishima adequately dispelled the doubts that were raised. Nevertheless, it certainly is the case that Dottor Fini's complete rejection of the Western ideals of modernity struck a chord with the audience. Some reference was made to a similarity between Dottor Fini's view and that of Yasuda Yojuro in his *Theory of Absolute Pacifism*, however I would have to say that although Yasuda presented an alternative vision to modernity, Dottor Fini presents no such vision. His criticism of modernity is certainly convincing but there is a destructive aspect to his mode of thinking which, in so far as it lacks a constructive element, winds up as a kind of Nihilism.

On the other hand, we might like to note the contribution of Dr Cesar de Prado Yepes who built on the strong interest in European Unification by using the experience of the European Community to shine some light on the kinds of concrete policies that might be relevant to similar attempts at integration in the Asian region. His comments received considerable attention and sparked lively discussion. Professor Masaaki Kimura expressed a degree of pessimism about the possibility of emulating the European case in Asia, something I tend to agree with (in fact I have written on the difficulties associated with unification in Asia from a theoretical perspective in the Bulletin of our Institute).¹⁾ Professor Kimura pointed out that the international system that emerged in the wake of the Peace of Westphalia has no correlate in the experience of Asia. This is in my opinion an extremely important point. I would even go so far as to say that even before the Westphalia system there had already been several

hundred years of wars and peace negotiation, conflict and cooperation, exchange of personnel and cultural interchange so that the nations of Europe built up a considerable store of 'know-how' in relation to the business of international relations,—it is this that laid open the path to unification later on. This kind of 'know-how' has been lacking in Asia, although it remains possible that the kinds of policies advocated by Dr de Prado may well deepen interaction between the nations of East Asia and strengthen mutual dependency so that a system of regional cooperation might emerge.

As for the contributions from the representatives of Japan's immediate neighbours, Professor Zhu for China and Professor Song for Korea, it was interesting how they both displayed an affinity for the words of Paul Hazard that were quoted by Dottor Fini at the commencement of his talk as they discussed the respective attitudes of their countrymen to America. In terms of the rapidity with which national sentiment changed towards America the comparison with France is appropriate, however I would draw attention to the fact that in the situation of Europe in the early nineteen-thirties it was the very things that had made America popular and the object of praise that became transformed into the reason for becoming critical. This is an important point to note if we are to distinguish between criticism of American policies and a reaction against Americanism. At present in East Asia the object of criticism is very clearly American policy. By contrast, the 'one set' ideology that conjoins market-led economics with democratic institutions, and "the American way of life", are showing no signs of losing their appeal. In fact we could even say that in China and Korea (and even Japan where anti-American sentiment is becoming strong) the pace of Americanization has if anything gained momentum. There are two comments I would like to add regarding this point. Firstly, it is perfectly conceivable that the current disaffection for American policy may well transform itself into a sentiment of anti-Americanism. Secondly, as Philip Roger has aptly emphasized, adopting the superficial trappings of Americanism does not necessarily signify an affinity with Americanism per se.²⁾

It is apparent that these two researchers from neighbouring countries, though detecting a similar trend of anti-American sentiment permeating their countries, nonetheless present a different view with regard to how they evaluate the values inherent in Americanism. On the one hand, Professor Song states that "For those who are comfortable with the 'American style' way of life, traditional values...are not to be preserved but rather supplanted by the universal values of democracy" which indicates agreement with American ideology. The object of his criticism is therefore the duality that arises from promoting these 'universal values' while being subject to an American policy that has supported an authoritarian regime. By contrast, Professor Zhu denies the universality of the "common ideals" that America promotes (democracy, market-led economics and human rights) and seeks to promote instead "common East Asian values". Within this proposal the aspect that particularly impressed me was his insistence on the need. I concur with this view although I must confess that I was surprised (in a positive sense) to see a Chinese variation on the "Japanese spirit, Western learning" in the twenty-first century.

¹⁾ Romano Vulpitta, *East Asia between Globalization and Regionalization*, The Bulletin of the Institute for World Affairs and Cultures, Kyoto Sangyo University, No. 17, 1999, pp. 146–170

²⁾ Philippe Roger, *L'Ennemi Américain* Paris, 2006, p. 582

The comments of Mr Hiroaki Hazu dealt more directly with the two keywords of the symposium,—Americanism and Europe. Mr Hazu was able to reveal a blind spot in American ideology where, despite insistences on the separation of church and state, there remains an extremely deep religious outlook. Moreover he illustrated how there was a fundamental antipathy towards Europe within that ideology. By discussing the issue using concrete instances from contemporary America, emphasizing the Bush administration in particular, he gave us some fundamentally important insights into Americanism.

As to the comments from the floor, Professor Kawakita joined in with Dottor Fini's presentation to condemn the modern pathology of "growth paranoia" while lamenting, nonetheless, a lack of a concrete remedy within the paper. In actual fact I believe Dottor Fini did present a remedy in his paper,—autarchy. Naturally, Dottor Fini himself is well aware of the unfeasibility of autarchy in the contemporary world and explained that what he really hoped to see realized was a reduction in consumption, something that I believe would be an important first step towards liberation from growth paranoia. Interestingly, Professor Kawakita was looking mainly to the history of East Asia to find hints of how a open world system free of that paranoia might develop and certainly we do find that in Chinese thought stability takes precedence over growth. Japan during the Isolationist period also possibly provides a useful reference. I would even suggest that the Roman Empire at its inception was a good model in that the system, while open in a way unlike Tokugawa Japan, nonetheless purposely restrained economic expansion and kept the bounds of territorial enlargement within a sustainable boundary. In recent times, America is often likened to the Roman Empire however I would say that they are two poles apart.

Emeritus Professor Kimitada Miwa's comments on the papers from the viewpoint of Japan-US relations also warrant particular emphasis, especially given that there were relatively few comments from that perspective from other participants. In particular, Professor Miwa's giving concrete examples about the difficulties of the Japan–U.S. relations, enabled us to grasp more succinctly the mental anguish that scholars of America have had to bear when confronted by American "fundamentalism".

Quite unlike any other commentator Professor Ikuo Sogami explored the possibility of applying the physical principle of inertia to international relations to come up with a scenario of Europe acting as a counter-force to slow down America's current direction. There were certainly aspects of this analogy that resonate with our understanding of politics as we do find in history that once a political process is underway it can be very difficult to arrest. We may well term this political, social or historical 'inertia' although I would emphasize that Professor Sogami expressed the opinion that it is human wisdom that determines how far that inertia can be deflected.

Professor Naoki Hazama had the extremely important task of making some comprehensive comments about the symposium as a whole. While recognizing the multi-layered nature of the theme along with the diversity of the views expressed by the participants, he was able to admirably handle this difficult job. There were a number of valuable insights offered through his comments however there are two points in particular that I would like to touch on. One is the observation that, although international relations may well be regulated by international law, at the base of law there must always be an ethical foundation. I completely concur with this sentiment. When we observe the developments in world affairs in recent times we cannot help but be confronted by the fact that so

many problems stem from an absence of ethics. Another important observation made in Professor Hazama's conclusion was the need to supplement our discussion of Americanism vs Anti-Americanism with a further reference to Western civilization in relation to Eastern civilization, something akin to the point made by Professor Zhu earlier on. The fact that he was able to expand on the distinction between West and East by focusing on the distinction between Confucianism and Christianity also illustrated the possibility of developing a more profound theory of civilization. By contrasting the Christian "Do unto others as you would have them do unto you" with Confucius' "Do not do to others what you would not like to have done to yourself" he succeeded in highlighting an essential difference, one that sheds light on the "obscure Western vice" of imposing one's own values on others. In the sense that this part of the legacy of the Christian cultural heritage, there was some affinity between this position and that of Dottor Fini. However, we should note that whereas Dottor Fini seeks out a remedy for our current problems within Western culture, particularly by going back to Greek philosophy, Professor Hazama seeks to transcend the Western dualism between good and evil by promoting the ideals of Confucian "golden mean".

Among all the issues raised at this symposium I have touched upon only a part,—this in itself testifies to the sheer breadth of the discussions that have been held. For us, this symposium has provided an abundant harvest, one that is primarily due to the lively debate among the participants.

In closing I would like to express my warmest thanks for the goodwill of all the participants. I am grateful for the unstinting support from the university, particularly for the exertions of the members of our Institute without whose efforts it would have been quite impossible to hold the symposium.